

日本手話と日本語のバイモーダル児のモードスイッチの要因に関する一考察 —対話者のモード使用を中心に—

平 英司

関西学院大学手話言語研究センター 客員研究員
関西学院大学人間福祉学部 非常勤講師

<要 旨>

ろう児を日本手話で養育する家庭(以下、手話家庭)に育つ聞こえる子ども(ろう児の兄弟姉妹)は日常的に音声による日本語と手指(身体)による日本手話とにふれ、バイリンガル・バイモーダル児となる。音声と手指という2つのモダリティーにふれる中で、聞こえる子どもたちは、1つの会話場面においても、手指による発話、音声による発話、両者を同時併用した発話という3つのモードを切り替える。本研究は手話家庭に育つ聞こえる子どものモードの選択・切り替えに焦点を置く。

今回、4軒の手話家庭に育つ6名の聞こえる子どものデータを分析対象とした。結果、音声モードや手指モードでは、対話者のモードの使用頻度に応じた聞こえる子どものモード使用の状況がみられた。このことから音声言語同士のバイリンガルと同様、対話者の言語使用に影響されていることが示唆される。さらに、音声に手指を加えたり、手指に音声を加えたりと併用モードの使用については、対話者以外の会話場面にいる参加者の状況をふまえた言語方略の影響も考えられる。

<キーワード> バイリンガル・バイモーダル, 手話家庭, モードスイッチ, コードスイッチ

【はじめに】研究背景

1. 手話家庭の出現

本研究は、聞こえる親が耳の聞こえない子ども(以下、ろう児)を日本手話で育てている家庭(以下、手話家庭)を対象としたものである。手話家庭は近年になり出現し始めた。ろう児のおよそ10人に9人は聞こえる親をもち(Mitchell&Karchmer2004)、日本語の優位な社会において、以前は手話の使用はろう児の(音声)日本語の習得を阻害すると考えられてきた。さらに、日本手話は、日本語とは異なる言語体系をもつ(岡・赤堀2011, 松岡2015)。日本語を手で表現した手指日本語とは異なり、日本手話独自の表情や口型(NMM:非手指マーカ)が文法機能を担う(木村2011)。そのため、日本語を話しながら使用することが困難であり、ろう児に対し、日本語の入力

を期待する聞こえる親の中に、日本手話を使用する者は、ほとんどいない状態であった。しかし、近年になり「ろう児にとって十分に入力可能な言語は日本手話である」、という認識のもと家庭内で日本手話を用いる手話家庭が関東を中心に出現し始めた(平2015b)。

2. 手話家庭の聞こえる子ども達

手話家庭にろう児の兄弟姉妹にあたる聞こえる子どもがいる場合、手指(身体)による日本手話と音声による日本語という2つのモダリティーに日常的にふれることからバイリンガル・バイモーダル児(以下、バイモーダル児)となる。ろう児には日本手話が必要不可欠であるとの認識で、手話での養育を始めた親にとっても、音声を伴わない日本手話を用いることが聞こえる子どもの

言語習得や言語使用にどのような影響を及ぼすのかについては、必ずしも確信が持てているわけではない。特に、一つの談話内で複数のモードを用いる現象（以下、モードスイッチ）にとまどう家庭も存在する。以下は、筆者がインタビューを行った手話家庭の母親がバイモーダル児Nの言語使用について語ったものである。

「Nがまだ小さかった時、ある時は声で話したかと思うと、ある時は声を出さずに手話で、とか声つけながら(手話)とか、そんな様子を見て、うちの母がこのままで大丈夫かって心配してました。」 (平 2015b)

手話家庭の言語使用の状況を明らかにすることは、ろう児と聞こえる子どもをもつ家庭が言語使用のあり方を検討するのに有用と思われる。

【目的】

3. 先行研究

音声言語のバイリンガル児の研究では、多くの研究者により一つの談話において複数の言語を用いるコードスイッチの研究が行われてきた。コードスイッチの要因は、幼いうちに複数の言語にふれることにより、幼児が混乱して言語を混ぜてしまうものと以前は考えられていた。しかし、現在では会話の状況等をふまえた言語方略の一つと捉えられている(Genesee1995、Comeau 他 2003)。会話の状況には、対話者や会話の参加者(本稿では、対話者のみならず会話場面にいる者を含み「参加者」と称す)の言語能力や言語態度、場面や話題などが含まれ、ドメイン(Fishman1965)と呼ばれている。例えば、2歳のフランス語と英語のバイリンガル児6名を対象に研究を行ったComeau 他(2003)は、対話者の言語使用の状況や言語に対する態度がコードスイッチを行う際の要因の一つと述べた。さらに、手話と音声言語のバ

イリンガル児のコードスイッチの研究として、親にろう者をもつ聞こえる子ども達(コーダ)3名を対象としたVan den Bogaerde&Baker (2008)の研究等がある。Bogaerdeらは、コーダに対し手話言語のみを用いるのか、手話言語と音声言語を用いるのかといった親の言語方略がコーダの言語使用に影響すると結論付けた。手話と音声言語のバイリンガルであるコーダであっても、音声言語同士のバイリンガル同様、対話者の言語使用や態度等がバイリンガル児の言語使用に影響を与え得ると言える。

4. 目的

では、バイモーダル児のモードスイッチの場合はどうであろうか。コーダの言語使用の研究では、親が音声言語と手話言語の両言語でコミュニケーションがとれるということは想定されていない。コーダは家庭の言語である手話と社会の言語である音声言語とのバイリンガルとなる可能性もあり、手話家庭のように親が日本語と日本手話の両方で話しかけるといった状況とは言語背景が異なる。また、1人の親が2つの言語を用いて話しかけるといった状況は、音声言語のバイリンガル家庭で主流となっている一親一言語方略(OPOL戦略)とも異なる状況である。音声言語同士のバイリンガル研究ではOPOL戦略を用いずとも、幼児は2つの言語を身につけていくという研究も見られるようになってきた(山本1991 他)が、手話と音声言語というモダリティーの異なる言語の組み合わせでの研究は筆者の一連の研究を除いて皆無である。はたして、バイモーダル児のモードの選択や切り替えについても対話者の言語使用と関係しているのだろうか。本研究では、バイモーダル児のモードの選択に焦点をあて、対話者のモード使用との関係を明らか

にする。

5. リサーチクエスチョン

バイモーダル話者は、日本手話と日本語という2つの言語に日常的に触れているわけだが、手指(身体)による言語表出モード(以下、手指モード)と音声による言語表出モード(以下、音声モード)に併せ、手指と音声による同時表出モード(以下、併用モード)という3つのモードを有する。この併用モードは音声言語同士のバイリンガル話者にはみられないバイモーダル話者の特徴である。

本研究ではモード選択の要因に関する一研究として、以下について明らかにする。

「バイモーダル児の各モード(手指、併用、音声)の使用頻度は対話者の各モードの使用頻度と相関しているのだろうか。」

【方法】

6. 研究対象者

本研究で対象とするのは4軒の手話家庭で育つ6名のバイモーダル児(N, K, C, R, M, m)である。各、家庭とも両親は、ろう児が生まれるまで、手話を身につける環境にはない。母親達は日本手話の教室に通ったり、ろう児との関わりの中で日本手話での日常会話が行えるようになっている。また、調査者は手話通訳士の資格を有している。

Nは、1999年5月生まれの女兒である。2002年8月に弟であるろう児が生まれ、母親は2003年より日本手話を習い始めた。したがって、Nは4歳時より日本手話にふれて育つこととなる。

Kは、Nとろう児の妹で2007年10月生まれの女兒である。以前、ろう児(兄)が幼稚部時代に通っていた地域の聴覚特別支援学校(ろう学校)は手話の活用に消極的で、口話を中心に授業や活動が進められていた。そのため、両親は手話環境

での教育を希望し、小学部入学を機に手話使用に比較的寛容な他県のろう学校へ入学をするために母、ろう児(兄)、Kは引っ越しをした。普段、Kは母、ろう児(兄)と生活し、夏休みなど長期の休暇では母や兄とともに、父親や姉のいる自宅で過ごしている。日中は聞こえる母親と過ごしたり幼児クラブに通う中で日本語の環境に身をおき、日本手話にふれるのは、兄がろう学校から帰宅しともに過ごす時間帯が中心となる。

Cは、2012年1月生まれの男児で、2006年1月生まれのろうの姉をもつ。日中は聞こえる母親と過ごしたり、保育所に通う中で日本語の環境に身をおき、日本手話の使用は姉が帰宅し、ともに過ごす時間が中心となる。母親のインタビューから、2歳になる前まで母親はCと2人の時も日本手話で話しかけることも多かったそうだが、現在は2人の時は日本語で会話をしている。

Rは、2010年11月生まれの男児で、2008年10月生まれのろうの姉をもつ。日中は聞こえる母親と過ごしたり、保育所に通う中で日本語の環境に身をおき、日本手話の使用は姉が帰宅し、ともに過ごす時間が中心となる。母親はろう児が幼い頃から手話での教育環境を希望していたが、当時生活していた地元のろう学校の幼稚部が口話中心であったために、日本手話で学べる環境を求め家族で関東に引っ越しをした。公立のろう学校でも学校により手話の位置づけが異なっている。そのため、N・Kの家庭やRの家庭のようにろう児の状況に合う教育を受けさせるためには、引っ越しざるを得ない家庭も存在する。

Mは、2005年9月生まれの女兒である。2002年6月生まれのろうの姉をもつ。両親は、ろう児が生まれ、生後数ヶ月で聞こえないと分かった段階で日本手話での養育を開始している。Mが誕生

する前にこの家庭を取り上げたテレビ番組で「聞こえる親がこれほどまで早くから日本手話で子育てに取り組んだのは、おそらく日本では初めてのケースであろう。」と紹介されている。母親の話では、初めは姉がいる場面では日本手話の環境であったが、聞こえる弟mが生まれてから、弟と音声日本語で会話をする事が多くなったと言う。

mは、ろう児やMの弟で2007年8月生まれの男児である。母親曰く、Mとは音声で会話するため、Mに比べ手話力は低いという。出生順の影響は、コーダ家庭(澁谷2009)や音声言語同士のバイリンガル家庭でも報告されている。

7. データの収集方法と収録日

手話家庭を訪問し、夕食時等、家族もしくは家族と調査者が机を囲んでいる場面を中心にビデオカメラを用い、家族及び調査者の会話場면을収録した。収録時間は15分～30分程度であった。訪問の日程は各家庭の都合に合わせて、無理のない範囲で行われた。そのため、データ収集の頻度や期間、参加者の人数に差が見られる。また、調査者である平が訪問していない際にも、負担のない範囲で手話家庭において食事時を中心に収録をしていただいた(データR, M, m)。収録日は以下の通りである。

対象児	会話の参加者	データ	年齢	収録日
N(女児) 1999.5	母、N、弟(2002.8)、調査者	N	8:01-8:02	2007.4/26,5/17
	母、N、弟、調査者、父	㊟	7:11-8:00	2007.6/15,6/27,7/4
K(女児) 2007.10	母、兄(2002.8)、K、調査者 *太字は、ろう児(生年月) 以下、同様。	K i	2:03-2:09	2010.1/19,3/9,7/12
		K ii	3:02-4:01	2010.12/15,2011.1/25,2/22,3/7,5/24,6/1,6/7,9/12, 10/18,10/31,11/14,11/28
		K iii	4:03-4:04	2012.1/31,2/13,2/21
C(男児) 2012.1	母、姉(2006.1)、C、調査者	C i	1:08-2:09	2013.9/19,10/17 2014.2/21,3/18,5/27,9/10,10/30
		C ii	3:01-3:11	2015.1/21,3/13,7/30,10/26
R(男児) 2010.11	母、姉(2008.10)、R、父	R	2:09-2:11	2013.8/26,8/27,9/24,10/20
	母、姉、R、父、調査者	㊟ i	2:10-2:11	2013.9/22,10/19
		㊟ ii	4:02-4:04	2015.1/22,3/14
M(女児) 2005.9	母、姉(2002.6)、M、m	M	8:00-8:01	2013.9/30,10/1,10/3
	母、姉、M、m、調査者	㊟	8:00-8:05	2013.9/22, 2014.2/20
m(男児) 2007.8 *Mの弟	母、姉(2002.6)、M、m	m	6:01-6:02	2013.9/30,10/1,10/3
	母、姉、M、m、調査者	㊟	6:01-6:06	2013.9/22, 2014.2/20

【表1：研究対象者と収録日】

8. データ整理とコード化

収録したデータは、子どもの年齢、会話の参加者の人数から、大きく14のデータ群(N, ㊟, K i, K ii, K iii, C i, C ii, R, ㊟ i, ㊟ ii, M, ㊟, m, ㊟)としてまとめた。ただし、K iiデータには4歳1ヶ月のデータも含まれている。データ群K iiとK iiiとの間には春休みがあり、その間は父親やNの住む実家で過ごし、言語環境も変化する。そのため、3歳2ヶ月～4歳1ヶ月までのデータは1群と捉えるのが適切と判断した。

年齢\人数	4人	5人	6人
1～2歳代	K i, C i, R	㊟ i	
3歳代	K ii (~4:01) C ii		
4歳代	K iii	㊟ ii	
5～6歳代		m	㊟
7～8歳代	N	㊟, M	㊟

【表2：参加者の人数とバイモーダル年齢】

収録されたデータを、インターバル記録法を用いて10秒ごとに区切り、誰から誰にどのモード

で話しかけがなされたのかを記号化（コード化）した（表3）。大人と子どもの会話が含まれているため、文単位で分析をする方法では、たとえ文の長さに大きな差があったとしても、その違いが表れないと考えたからである。コード化は、筆者以外に手話通訳士を含む4名の協力者とともに進められ、誰に対する話しかけなのか等判断に迷う際には、文脈や視線等を全員で確認した。また、それでも判断がつかないもの、もしくは独り言と判断されたものについては、不明とした。なお、複数の対話者に対し発話している場合はそれぞれの枠に表記するようにした。コード化した表をもとに、10秒ごとに誰から誰にどのモードでの発話が見られたのかをそれぞれ計上した。その際、不明と記したものや明らかな身振りを伴うもの手遊び歌等はカウントから外した。そして、バイモーダル児に対し、対話者が話しかけたモードの割合（頻度）とバイモーダル児が各対話者に話しかけたモードの割合（頻度）を算出し、比較、分析を試みた。

誰が	誰に	0								1 …		
		秒)0~	10~	20~	30~	40~	50~	0~	10~	…		
母	K	J	J/W						S			
	ろう児					S		S				
	調査者					S	S,W					
	不明											
K	母親	J		s	w				J	J		
	ろう児		S									
	調査者					J			S			
	不明			J(独語)						J		
ろう児	母親	W						S				
	K				W			S				
	調査者	S	S	S				S	S			
	不明						S					
調査者	母						S	S				
	K					S		S				
	ろう児	S	S		S			S	S			
	不明											

【表3：コード化の一例】

(S=手指モード, W=手音モード, J=音声モード。

s=明らかな身振り, w=身振り+音声

A/BはAからBへの文内モードスイッチ。

A, Bは10秒間に2つのモードが見られたという意味)

【結果と考察】

9. 結果

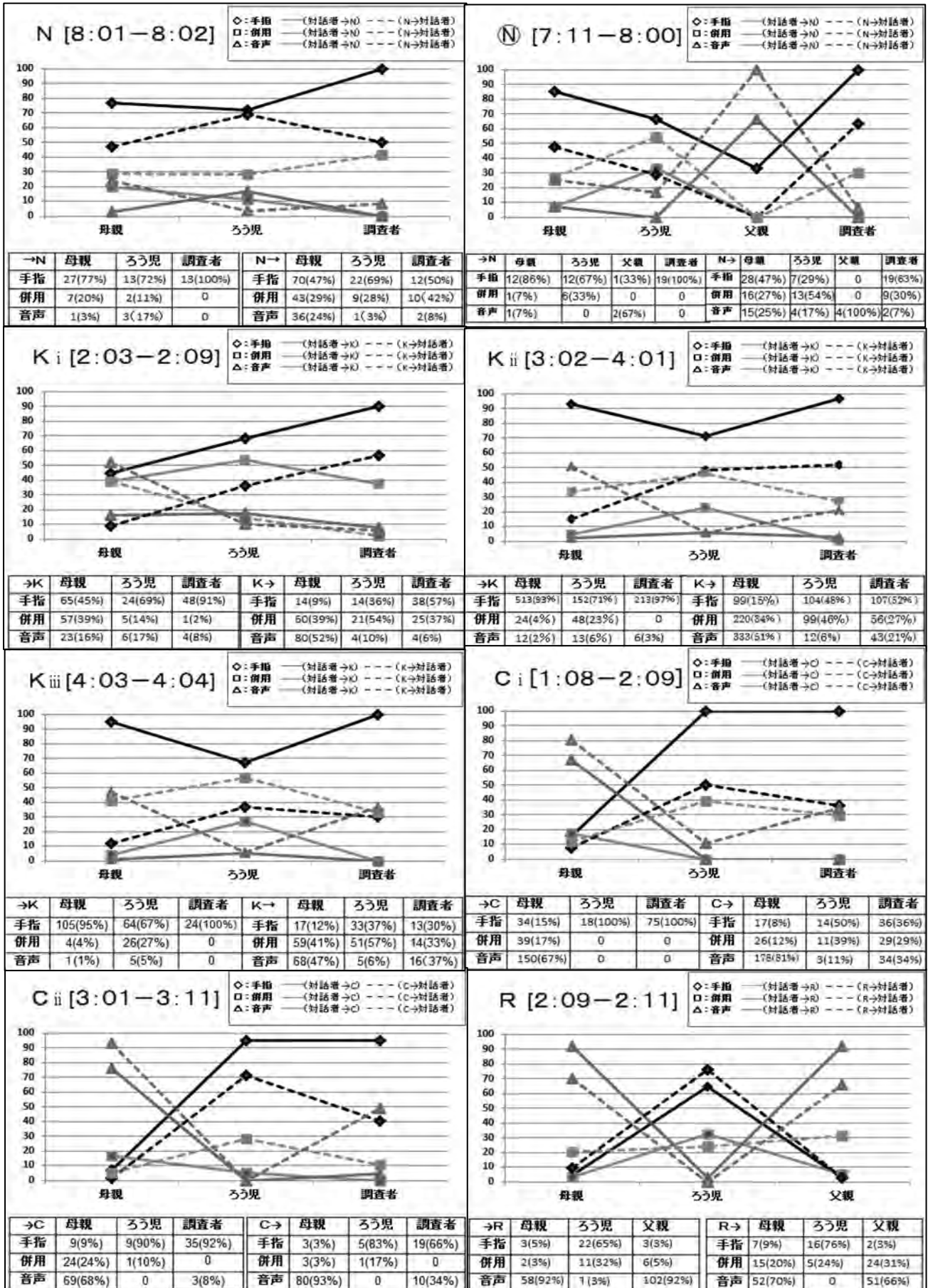
モードの使用の状況については、話者によって異なる。また、同じ話者であっても年齢や参加者の人数の違いなどによりモード使用の状況は異なっている。しかし、対話者とバイモーダル児のモードの使用において、手指モードや音声モードでは、併用モードに比し、高い相関関係(相関係数 0.7 以上)が多く見られる。データ数が少ないものもあるが、全体として一つの傾向があると言えるのではないだろうか。

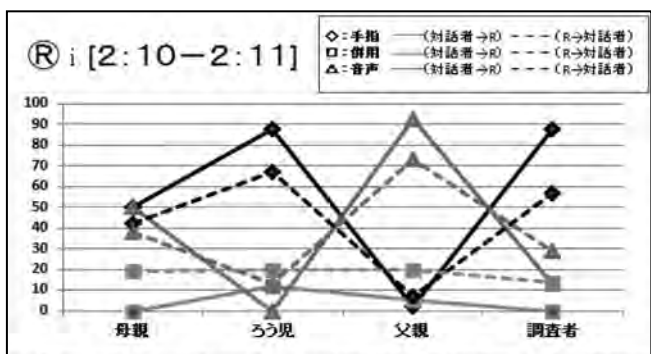
14のデータ群の中で、手指モードでは11データ群、音声モードでは10データ群で高い相関関係が見られた。一方、併用モードの場合14のデータ群のうち、高い相関関係が見られたのは3データ群のみであった。次頁以降に、対話者からバイモーダル児に対しての各モードの頻度を実線、バイモーダル児から対話者に対しての各モードの頻度を点線として、各データをグラフ化したものを掲載した。

データ	手指モード	併用モード	音声モード
N	-0.5	-0.9	-0.6
㊸	1.0	0.8	1.0
K i	1.0	-0.1	0.5
K ii	-0.3	1.0	-0.9
K iii	-0.6	1.0	-0.9
C i	0.9	-0.9	0.9
C ii	1.0	0.1	1.0
R	1.0	-0.1	1.0
㊹ i	1.0	0.5	1.0
㊹ ii	0.9	0.6	0.9
M	0.9	-0.7	1.0
㊺	1.0	-0.4	1.0
m	1.0	-0.5	1.0
㊻	0.7	-0.9	0.7

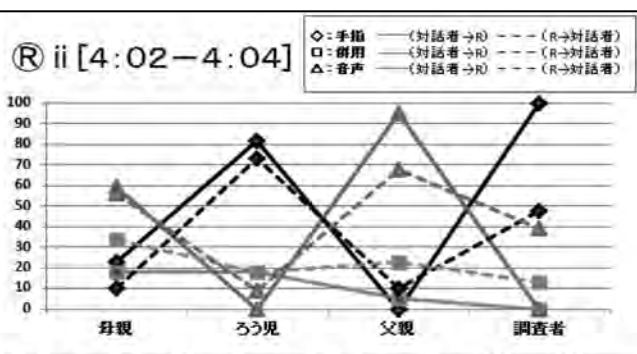
【表4：相関係数（少数第2位を四捨五入）】

結果：対話者とバイモーダル児のモード使用の頻度(%) (年齢：月齢) *紙面の都合上順不同

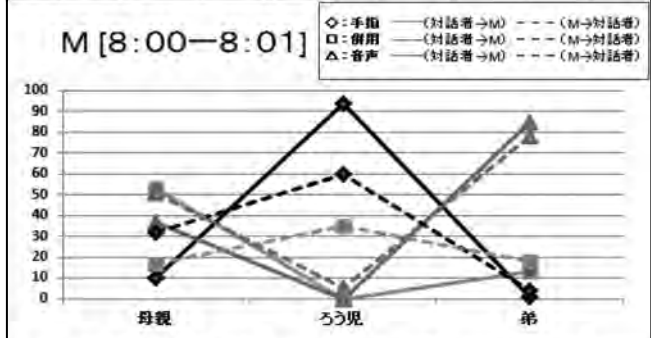




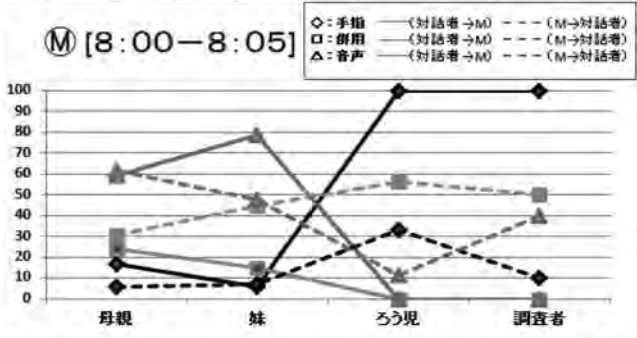
→R	母親	ろう児	父親	調査者	R→	母親	ろう児	父親	調査者
手指	3(50%)	15(88%)	2(2%)	7(88%)	手指	11(42%)	10(67%)	9(7%)	4(57%)
併用	0	2(12%)	5(5%)	0	併用	5(19%)	3(20%)	27(20%)	1(14%)
音声	3(50%)	0	100(93%)	1(13%)	音声	10(38%)	2(13%)	97(73%)	2(29%)



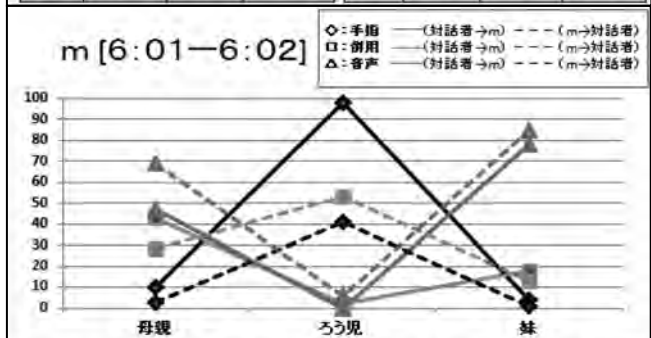
→R	母親	ろう児	父親	調査者	R→	母親	ろう児	父親	調査者
手指	9(23%)	9(82%)	0	23(100%)	手指	7(10%)	8(73%)	11(10%)	11(48%)
併用	7(18%)	2(18%)	5(5%)	0	併用	25(34%)	2(18%)	26(23%)	0
音声	23(59%)	0	89(95%)	0	音声	41(56%)	1(9%)	77(68%)	0



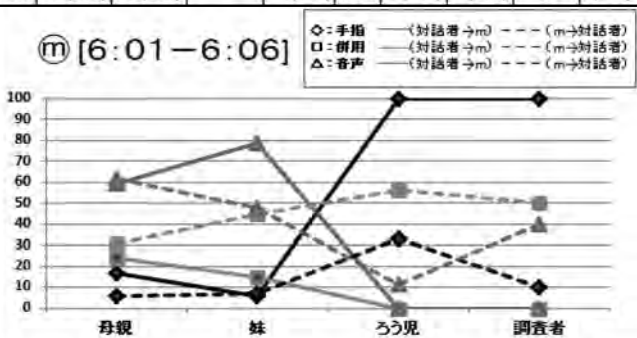
→M	母親	ろう児	弟	M→	母親	ろう児	弟
手指	12(10%)	61(94%)	1(1%)	手指	38(32%)	51(60%)	5(4%)
併用	62(53%)	4(6%)	11(13%)	併用	20(17%)	30(35%)	21(18%)
音声	43(37%)	0	70(85%)	音声	62(51%)	4(5%)	91(78%)



→M	母親	弟	ろう児	調査者	M→	母親	妹	ろう児	調査者
手指	33(38%)	6(7%)	18(100%)	8(89%)	手指	15(20%)	5(6%)	18(62%)	7(47%)
併用	30(34%)	39(45%)	0	0	併用	16(22%)	13(15%)	11(38%)	2(13%)
音声	25(28%)	41(48%)	0	1(11%)	音声	43(58%)	66(79%)	0	6(40%)



→m	母親	ろう児	妹	m→	母親	ろう児	妹
手指	13(10%)	46(98%)	5(4%)	手指	3(3%)	20(41%)	1(1%)
併用	56(43%)	1(2%)	21(18%)	併用	26(28%)	26(53%)	11(13%)
音声	61(47%)	0	91(78%)	音声	64(69%)	3(6%)	70(85%)



→m	母親	妹	ろう児	調査者	m→	母親	妹	ろう児	調査者
手指	14(17%)	5(6%)	13(100%)	1(100%)	手指	6(6%)	6(7%)	6(33%)	1(10%)
併用	20(24%)	13(15%)	0	0	併用	29(31%)	39(45%)	10(56%)	5(50%)
音声	49(59%)	66(79%)	0	0	音声	58(62%)	41(48%)	2(11%)	4(40%)

10. 考察

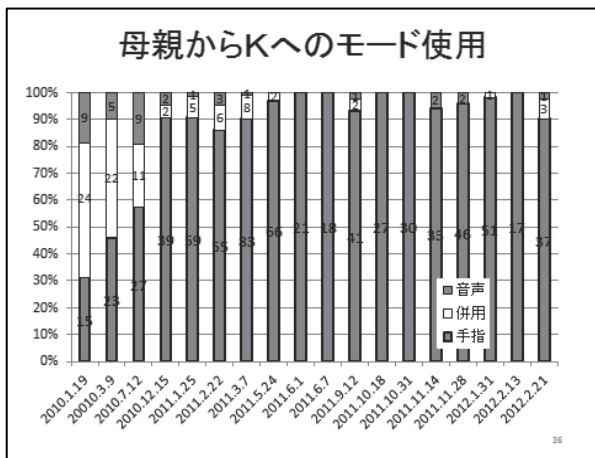
10.1 手指モード

11 のデータ群で高い相関関係が見られたが、3つのデータ群では高い相関関係が見られなかった。データ群Nの場合は、Nに対しろう児<母親<調査者の順に手指モードの頻度が高くなっているが、バイモーダル児は、母親≒調査者<ろう児の割合で手指モードの使用頻度が高まるっている。母親や調査者には音声モードの使

用もできるが、ろう児には手指モードが必要であるという意識が影響しているとも考えられる。

K ii やK iii のデータでは高い頻度で手指モードを使用する者に対して、高い頻度で手指モードを使用していない。例えば、Kは母親が手指モードで話しかけても、音声で返答をする場面も見られた。K i のデータを見ると、Kに対し母親は手指モードと併用モードを同じくらいの頻度で使用していることが分かる。それに対し、

Kも母親には音声や併用モードで話しかけていたわけだが、その後母親は、K ii, K iiiのデータで手指モードの使用の頻度を高めていく(表5)。



【表5：母親からKへの使用モード】

母親が使用モードの頻度を変化させても、Kは従来のモード使用を変化させず、そのスタイルは家庭内で容認されてきた。グラフからK iのデータとK ii, K iiiのデータにおいて、Kのモードの使用が類似していることが見てとれる。そのため、手指モードの使用頻度が高い母親と音声を使用し続けるKとの間でモードが合致しないコミュニケーションスタイルが成立していると考えられる(表6：発話例1参照)。また、手指モードの使用が少ないから手話力がないということではない。コミュニケーションが成立するには、Kが母親の手指モードを理解できていることが前提となる。

また、ろう児がいる場面では基本的に手指モードを使用する調査者は、手指モードの使用の頻度が95%以上である。バイモーダル児は調査者の耳が聞こえるという知識は有している。しかし、調査者に手指モードで話しかける中で、手話単語が分からない場合には、調査者に音声で話しかけたり、調査者に手話表現を訊ねたりするのではなく、一旦、母親に音声で手話表現を聞き(調査者にも、そのやりとりが聞こえてい

るのだが)、再度手指モードで調査者に話を続けるという行動が何度か観察された(表7：発話例2参照)。聴力よりも対話者の言語使用や言語態度を意識した行動と考えられる。

発話例 1		K 2011.2.22 *A,B,Cは仮名
<状況>お友達のお昼ごはんの様子について		
(A)	(B)	発話内容
1.K→ 母	音声 手指	A君 ラーメン食べた?
2.母→ K	音声 手指	そうそう
3.K→ 母	音声 手指	B君は?
	音声 手指	食べた
5.K→ 母	音声 手指	C君は?
6.母→ K	音声 手指	食べてない。家帰ってごはん。

【表6. 発話例: Kの音声モードと母親の手指モード】

発話例 2		M 2014.2.20
<状況>学校で何を習っているかを説明		
(A)	(B)	発話内容
1.K→ 筆者	音声 手指	算数と・・・
2.K→ 筆者	音声 手指	う〜んとね。
3.M→ 母	音声 手指	お母さん国語ってどうするの?
4.母→ M	音声 手指	国語 国語
5.M→ 筆者	音声 手指	国語

【表7. 発話例: 母親に手話を訊ねるM】

(A) 発話番号. 発話者→発話相手. (B) 使用モダリティ
会話例2-発話番号4は併用モードを意味する。

10.2 音声モード

14データ群のうち、10で高い相関関係が見られたが、4つのデータ群で対話者とバイモーダル児の使用モードに相違が見られた。データ群Nでは、ろう児がNに音声モードで話しかけているが、Nはろう児に音声モードではなく手指

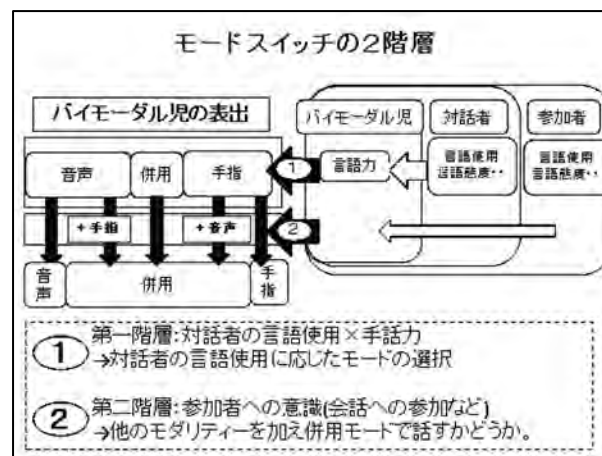
モードで話す必要性を有しているため、音声モードの使用頻度においてろう児とNとでは相違がみられると考えられる。また、前述したようにKは、母親が手指モードで話しかけても音声モードで返答することもあり、対話者のモード使用と相違がみられる。このように見ていくと、音声言語のバイリンガル児が対話者の言語使用や言語態度に影響しているのと同様に、日本手話と日本語のバイリンガル・バイモーダル児は、対話者の言語使用や言語態度をふまえてモードの切り替え・選択を行っていると考えられる。

10.3 併用モード

一方で、併用モードについては、14データ群のうち、11のデータ群で対話者とバイモーダル児との使用頻度の傾向に相違がみられる。対話者の言語使用や言語態度に加え、他の要因が手指モダリティーや音声モダリティーよりも影響しているのではないだろうか。対話者が聞こえる者であれば音声モードで、聞こえないろう児であれば手指モードで通じる。併用モードへの切り替えの場合、音声言語のコードスイッチとは異なり、対話者がバイリンガルである必要性はなく、対話者の言語能力を意識する必要はない。手話力の低い相手に音声で話しかけつつ手指を加えたり、音声の聞こえない相手に手話で話しかけつつ音声を加えて会話をした場合、対話者が受信してきた言語自体は保持されている。ゆえに、併用モードは「コードブレンド」とも呼ばれている(Emmorey 他 2005)。併用モードの場合、対話者以外の参加者の存在が影響すると考えられる。例えば、母親と音声モードで話している際にろう児である兄弟姉妹の存在を意識したならば、そこに手指モードを加えるかもしれない。対話者以外の参加者の言語使用や言

語態度を意識したオーディエンスデザイン(Bell, 1984)として併用モードが現れることも示唆され、今後の研究が期待される。

対話者の言語使用や言語態度をふまえて手指モードや音声モードを選択する事と、手指モードや音声モードに、場の参加者の状況もふまえて他のモダリティーを加える事とでは、モードの選択に階層性があるのではないだろうか(表8)。



【表8. モードスイッチの2階層】

【まとめ】

11. まとめ

本研究では、日本手話と日本語という手話と音声言語のバイリンガル児の言語の切り替えが、音声言語同士のバイリンガルと同じように対話者の言語使用や言語態度に影響されていることが示唆された。さらに、音声モードに手指モダリティーを加えたり、手指モダリティーに音声を加えたりと併用モードの使用については、対話者以外の会話場面にいる参加者の状況をふまえたオーディエンスデザイン等の影響も考えられ、今後の研究が求められる。

本研究は年齢も状況も異なる4軒の家庭の6人のバイモーダル児に限った研究であり、結果をそのまま一般化することは難しい。今後、手話家庭やバイモーダル児の研究が発展していくことを期待する。

【参考文献】

- Bell, A. (1984) Language Style as Audience Design. Coupland, N. and A. Jaworski (1997, eds.) *Sociolinguistics: a Reader and Coursebook*, pp. 240-50. New York.
- Bogaerde, B. van den & A. E. Baker (2008). Bimodal language acquisition in Kotas. M. Bishop & S. L. Hicks (eds.) *Hearing, Mother Father Deaf. Hearing people in Deaf families*. Series: The Sociolinguistics in Deaf Communities Series, ed. Ceil Lucas. Washington: Gallaudet University Press., pp. 99-131.
- Comeau, L., Genesee, F. and Lapaquette, L. (2003). The Modeling Hypothesis and Child Bilingual Codemixing. *The International Journal of Bilingualism*, 7(2), pp. 113-126.
- Fishman, J. A. (1965) Who speaks what language to whom and when?. *La Linguistique*, 2, pp. 67-88.
- Genesee, F., Nicoladis, E., & Paradis, J. (1995). Language differentiation in early bilingual development. *Journal of Child Language*, 22, pp. 611-631.
- Karen Emmorey, Helsa B. Borinstein, and Robin Thompson. (2005). Bimodal bilingualism: code-blending between spoken English and American sign language. James Cohen, Kara T. McAlister, Kellie Rolstad, and Jeff MacSwan (eds.). *proceeding of the 4th International symposium on bilingualism*, pp. 663-673. , MA: Cascadilla Press.
- Mitchell, R. E. & Karchmer, M. A. (2004). Chasing the Mythical Ten Percent: Parental Hearing Status of Deaf and Hard of Hearing Students in the United States. *Sign Language Studies*, 4 (2), pp. 138-163.
- 岡典栄, 赤堀仁美 (2011) 『日本手話のしくみ』大修館書店.
- 木村晴美 (2011) 『日本手話と日本語対応手話 (手指日本語)』生活書院.
- 小嶋勇監修, 全国ろう児をもつ親の会編 (2004) 『ろう教育と言語権』明石書店.
- 渋谷智子 (2009) 『コーダの世界』医学書院.
- 平英司 (2014) 「日本手話と日本語のバイリンガル・バイモーダル児の言語使用」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第 11 号. pp. 99-109.
- 平英司 (2015a) 「日本手話と日本語のバイモーダル児の手話 (手指モダリティー) 使用 - 2 歳 2 ヶ月の幼児に関するケーススタディー -」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第 12 号. pp. 69-77.
- 平英司 (2015b) 「モードスイッチにおける言語構造の切り替え ~ バイリンガル聴児 K のケーススタディーを通して ~」『手話学研究』Vol. 24, 日本手話学会. pp. 31-49.
- 松岡和美 (2015) 『手話言語学の基礎』くろしお出版.
- 山本雅代 (1991) 『バイリンガルーその実像と問題点 -』大修館書店.
- 山本雅代 (編著) 井狩幸男, 田浦秀幸, 難波和彦 (2014) 『バイリンガリズム入門』大修館書店.

【謝辞】

バイモーダル話者の多人数会話場面という複雑で膨大なデータの分析に助成いただいた「明治安田こころの健康財団」の皆様、お忙しい中、長期にわたり訪問やデータ収集に快くご協力いただいた手話家庭の皆様心より感謝申し上げます。